

人生

恩の形而上学から

人生では誰にでも、説明できないような記憶の一つや二つはあるものである。生き方の転機となった人との出会い、危機一髪での命の落掌、岐路での選択するなど、生涯で出会う書物もその一つである。

「恩の形而上学」という書物は、哲学者、森信三先生の数ある著書の中でも「修身教授録」と並んで私に深い感銘を与えた書である。

この書の重さは先生の体験を通して、人としての生き方を説いている点にある。幼くして農家に養子として出され、刻苦勉励して学資の要らない師範学校へ進学し、後、広島高等師範、京大の哲学科へと進む。そこで西田幾多郎という近代日本哲学を代表する大先輩に師事することになる。京都帝大の大学院を優秀な成績で卒業し、天王寺師範、建国大学教授戦前満州国にあった大学へ戦後は神戸大学で教鞭を執る。しかし「ローソクは火を点けなければ明るくならない。それと同じように人間は、志に火が点かなければその人の持っている真値は発揮されない」と、若い教育者の養成に生涯をかけることを決意する。富も名声も求めず、後輩たちに影響を与え続ける道を選んだのである。しかも、生家については一言の恨みも云わず、養い親についての恩言は第三者が読んでも溢れるものがある。

人生とは魂の充足を追い続ける旅であり、名著を味読することもその範疇にあることは言うまでも無い。では、生の重さとは、何処にどんな形で存在するのか、親と子の関係を実話で考えてみたい。

「昔、あるところに夫を亡くしたばかりの女の人が暮らしていた。雪の降る夜、意地の悪い姑さんに食べ物を手に入れてくるように云われた。女の方は身籠もっていたが、当てもなく雪の中を隣村との境の橋まで来た。そこで急に産気付き橋の下で男の子を産んだのである。母親は自分が身につけていた衣を脱ぎ赤子を包んだ。翌朝、村人がこれを見つけたが、母親はすでに凍死していたのであった。

しかし、赤子は母親の温ぬくみに守られ生き残ったという。この赤子は成長してこの話を知るところとなり、母親の墓を捜して歩くと橋の根方に朽ちかけた無縁墓があった。それは紛れも無い母親のものであった。すると、この男の子は自分の着ていた着物を脱ぎ、さぞ冷たかっただろう。寒かっただろうと涙を流しながら、自分の衣を墓に掛けてやった」という話である。そして、その後、男の子は立派な僧となり国々の無縁仏を菩提して歩き、人々から生き仏と称えられたという。

もう一つ、「或るところに貧しい農家があった。ある日学校から帰

った娘が「今年の学芸会に先生から白鳥の役で出るようにと告げられたと悲し気な顔をした。娘は自分の家の暮らしでは、白鳥の白い服は手に入らないだろうと思っていたからである。誰にも云わず当日は学校を休む決心をしていた。学芸会は翌日に迫り長い夜が過ぎ、朝起きてみると真っ白なワンピースが枕元に置いてあったのである。それは、母が花嫁としてこの家に嫁ぐ時に着てきた白い肌着の生地で作られていたのである。母親はその衣をほぐし徹夜で縫い上げたのであった。家計を思い何も話さなかった娘、二人に言葉は要らなかつたのである」これが親子の情というものであろう。家内は一度だけこのことを恥ずかしそうに私に話したことがあった。その母が他界するときその手を取り、娘はその母の手のぬくもりが消えるまで「永い間、本当にほんとうにありがとうございます」と握り続けていたのであった。

これらの話とは全く逆な現実もある。平成二十二年七月三十一日、新聞、テレビは心を凍らせるようなニュースを報道した。大阪市で起きた幼児二人の育児放棄である。私の心は憤りを超え、やるせなさに胸が詰まった。この事件は単に偶発的、衝動的な殺害ではなく、まだ生きる術すべを持たない幼児たちの食を断つという、最も苦しみを

伴う確信的犯行であったからであった。

テレビの画面には、公園で遊ぶ二人の笑顔も映し出され、疑いを知らず、時々しか帰って来ない人であっても、幼い二人にとってはこの人がただ一人の母親であり、この人を信じ、頼るしか生きる道は無かったのである。

ある日、二人には部屋の外からカチリと錠が掛けられた。二人にとってその音は、母親ともこの世とも別れになる冷たい音になったのである。待っても待っても、次の日も次の日もお母さんは戻っては来ない。隣家に入入りする足音に耳を澄ましても、二人のいるアパートの鉄製の扉が開くことはなかったのである。空腹に耐えかね、一歳の弟は泣きじゃくり、三歳のお姉ちゃんはせめてもと水を与えようとするが、水も止められていたのである。幼い二人は夏の炎熱の中、飢えと渇きの地獄にいたのである。どちらが先に絶命したのかは分からないが、お姉ちゃんは弟を抱きかかえるように亡なっていて、司法解剖の結果お腹の中には何も無かったと報じられた。これが、母の意思とするならば、鬼畜にも劣る悪魔の所業としか思えない。人は必ず役目を持ってこの世に登場するといわれるが、三年間と一年間この二人は何を見、何を感じて遠く旅立って逝ったので

あろうか。

飽食の時代に餓死とは余りにも悲惨で、実の母親の意図的な行為だけに心が抉られるような戦慄を覚えた。幼い二人の幼児を死に至らしめた行為は人間の尊厳を無視し、命あるものすべてに反逆する身勝手な行為で、どのような弁解も通用するものではない。

これは、単に親子の情について語っているだけではない。極端な事例かも知れないが、前者は人が人としてあるべき本来の姿を象徴しているし、一方は知的生物としても本能からも大きく逸脱していると思われるからである。

森先生が云われた言葉に「生まれてきた幸運も死から逃れることは出来ない。だからこそ、生には意味がある」これは釈尊が出家する動機となったと云われている、「生・老・病・死」の真理に近似している。しかも、「意味ある道は自分の意志で作ることが出来る。」確かに出会いや体験、古今の書は人間を変え、育てるかも知れない。しかし、実母に遺棄された幼児二人の死は、懸命に言葉を捜しても、私の心を納得させることはなかった。でも、翻って考えてみると、二人の幼児の死は、人間の愚かさをすべての人々の記憶に留め、刻み遺して逝ったことも事実である。